

平成23年6月6日現在

機関番号：32621
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19402036
 研究課題名(和文) 英語化とアジアにおける社会編成—マレーシアの民間高等教育産業の展開と波及効果
 研究課題名(英文) Englishization in Asia: The Development of Malaysia's Private Higher Education and its Effects on Social Formations in Ethnic, National and Regional Contexts
 研究代表者
 吉野 耕作 (YOSHINO KOSAKU)
 上智大学・総合人間科学部・教授
 研究者番号：50192810

研究成果の概要(和文)：マレーシアにおいて英語を媒体としてトランスナショナルに成立する民間の高等教育モデルの展開と波及効果を考察した。このモデルの展開は、マレーシア国内のエスニック関係や社会階層、ナショナリズムのみならず、アジアと西洋を結ぶ国際移動・移住にも影響を及ぼしている。また、同モデルが他国に技術移転される状況とそれを推進している仲介者の役割を考察する中で、マレーシア国内のエスニシティとより広い諸「文明」とのトランスナショナルな繋がりに無視できない影響を与えている様相を確認した。

研究成果の概要(英文)：This study examines the invention and development of Malaysia's transnational and English-medium private higher education and its effects on social relations and networks. What may be referred to as the Malaysian model of higher education has impacted ethnic relations, social classes and nationalism in Malaysia as well as patterns of migration of students between Asia and the West. Moreover, the model is now being diffused to other (mostly, developing) countries. Particular attention is drawn to multicultural and multilingual Malaysians who play the role of cultural intermediaries in this process. The study also suggests that the Englishization of higher education works as a medium in connecting Malaysia's ethnicities to broader, transnational categories of 'civilizations'.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
総計	5,900,000	1,770,000	7,670,000

研究分野：ナショナリズムの社会学

科研費の分科・細目：社会科学B・社会学

キーワード：グローバル化、高等教育、英語、エスニシティ、国際移動、マレーシア、留学生

1. 研究開始当初の背景

英語化(英語使用の拡大)は新たな世界秩序の方向性を考える上で最も重要な視点の1つである。アジアにおける英語化をめぐる様々な波及効果をうみ出している制度として、マレーシアの民間の高等教育モデルに焦点をあてた。

この制度は、マレーシアにおいて1980年代以降トランスナショナルなネットワークを基盤として創造された新しい形の高等教育モデルである。マレーシアの民間のカレッジ(その前身は民間の専門学校や大学進学予備校)がアメリカ、イギリス、オーストラリアなどの諸大学とトランスナショナルな単

位移行やトゥイニングを通して、マレーシアに居ながらにして「西洋・英語国」の大学の学位取得が可能な仕組みが創られた。

このモデルは、マレーシアで創造・開発された社会経済的モデルであり、他の諸国（主に開発途上国）においてオルタナティブな高等教育モデルとして模倣されている。非西洋国で内発的に創造された社会経済モデルが他国に技術移転されるのはきわめて珍しい。さらには、英語を媒体とするこの制度の展開は、マレーシア国内のエスニック関係や社会階層、ナショナリズムに作用しているのみならず、アジアと西洋を結ぶ国際移動・移住やトランスナショナルな繋がりに無視できない影響を与えている点など極めて重要な制度である。それにも関わらず、社会科学の先行研究はほとんど存在しなかった。このような背景の中で、同モデルの展開とその波及効果の調査・分析を着想した。

2. 研究の目的

マレーシアにおける民間の高等教育モデルの展開は、アジアにおける英語化の諸様相を象徴的に表している。本研究の目的は以下の通りである。第1に、同モデルがマレーシアの特定の社会・経済・政治的状况において創造・開発された過程を明らかにする。第2に、同モデルがマレーシア国内のエスニック関係や社会階層に与える影響を分析する。第3に、同モデルの展開が、アジアと西洋を結ぶ国際移動・移住に与える影響を考察する。第4に、同モデルが他国に技術移転される状況とそれを推進している仲介者の役割を考察する。さらには、これらの研究を通して、マレーシア国内のエスニシティとより広い諸「文明」とのつながり等に影響を及ぼしていることが予想される。トランスナショナルな社会の再編成に与える波及効果を理論化する。

3. 研究の方法

同研究テーマに関して信頼のおける統計や歴史的資料が欠如しているため、当事者に対する聞き取りを主な調査研究方法とした。具体的な調査は以下の通りである。

(1) マレーシアにおけるトランスナショナルな民間の高等教育モデルの創造・展開に関する調査

- ①マレーシアにおける主要な民間のカレッジの創始者や経営陣に対する聞き取り
- ②提携先の「西洋・英語国」の大学担当者の聞き取りおよび通信（記憶・記録の照合）
- ③ブミプトラ政策下におけるエスニック関係の影響に関する専門家の聞き取り
- ④マレーシアの新聞アーカイブにおける資料調査

(2) 同モデルがマレーシア国内のエスニック関係および社会階層に与える影響の分析

- ①民間の高等教育機関（カレッジおよび格上げされたユニバーシティ・カレッジ）の経営陣、就職担当者の聞き取り
- ②民間企業の経営陣・人事担当幹部の聞き取り
- ③マレーシアの新聞アーカイブにおける資料調査

(3) マレーシアにおける高等教育の英語化が留学生の国際移動・移住経路に与える影響に関する調査

- ①インドネシア華人の留学生の送り出し側の現状を明らかにするため、マレーシアの民間の高等教育機関のジャカルタ校の経営陣、留学斡旋エージェント、マレーシア大使館付教育センター長などに対する聞き取り、および留学経験者に対する聞き取り。
- ②アジアのムスリム留学生の送り出し側の現状を探索するため、モルジブにおけるマレーシア向けの留学斡旋エージェントおよび留学経験者に対する聞き取り。

(4) マレーシアの高等教育モデルの国際技術移転と文化的仲介者の役割に関する調査

- ①マレーシアの民間の高等教育機関の経営陣および海外市場担当者に対する聞き取り。
- ②海外における技術移転の事例としてベトナム国立大学国際学校の視察と校長および教授陣に対する聞き取り。

以上の主な調査方法に加えて、視点を絞り込むために、その他の国・地域における英語化の状況に関して補足的調査を行った。

また、海外の研究協力者と議論を通して、国際比較研究の理論的方向性と方法論的可能性および本研究の意義について確認および調整を行った。

4. 研究成果

英語を媒介とした高等教育のマレーシア・モデルが構築された背景およびそれがナショナルおよびトランスナショナルな社会編成に及ぼす影響に関して、主に以下の研究成果を得た。

(1) マレーシアにおけるトランスナショナルな民間の高等教育モデルの創造・展開

民間の高等教育が試行錯誤的に始まったのは1983年のことである。ブミプトラ優遇措置や大学教育のマレー語化が徹底した1980年代前半には、非マレー人の海外留学が増加した。国立大学入学枠や海外奨学金制度において優遇されていたマレー人とは対照的に、私費で留学する非マレー人にとって経

済的負担は大きかった。1980年英国の大学が留学生に授業料を課す決定をしたことが引き金になり、高等教育を受けるための新たな方法が模索されることになった。

1983年時点で、マレーシアの高等教育制度は、マラヤ大学、マレーシア科学大学、マレーシア国民大学、マレーシア技術大学の国立大学4校のみであった。ここで重要な役割を果たしたのは、民間のアクター、主に非マレー人の起業家達である。民間における中等教育終了後の教育制度としてはカレッジがあったが、大学入学準備のための塾や予備校あるいは専門学校であり、学位の授与は認められないし、自前のカリキュラムを作る専門知識や人材も持ち合わせていなかった。しかし、既存の民間のカレッジを活用して何らかの高等教育が受け入れられる仕組みが模索された。

このような背景の中、アメリカの短期大学の卒業生が4年制大学に単位移行し編入する制度にヒントを得て、単位移行(credit transfer)制度のトランスナショナルな応用が模索された。マレーシアの民間のカレッジにおける2年間の修学後、アメリカの大学に編入、学位取得を可能にする仕組みが創造された。具体的には、民間のカレッジの1つであるKDU(Kolej Damansara Utama)が1983年に創設したものが最初である。その後、トランスナショナル化はイギリスの大学をも対象とするようになり、マレーシアのカレッジに1年間修学後、残りの年限をイギリスの提携大学で学び学位取得ができる仕組み「1+2」が考案された。この制度はツイニング(twinning)と呼ばれ、その後、「2+1」「3+0」と展開した。ツイニングは、同じくKDUが1986年に英・ミドルセックス・ポリテクニックと始めたのが最初である。他のカレッジも次々に同様のトランスナショナルなプログラムを開設し、民間の高等教育モデルとして定着した。

創設時のKDU元幹部に長時間にわたる綿密な聞き取りを繰り返し行い、さらには交渉相手であったミドルセックス側の当時の担当者の居所の特定に成功し、イギリス側の事情に関して聞き取りを行うことができた。その他、長期間かけて主要な民間のカレッジ経営陣とラポールを築き貴重な情報・知識を共有することが可能になった。その結果、高等教育のマレーシア・モデルの創造・展開に関して詳細な記述を行うための豊富な材料を収集した。特に民間の高等教育機関と国家(文部省、高等教育省および政治家)との交渉は、ノン・ブミプトラである華人とブミプトラであるマレー人との駆け引きの意味を持ち、そうした政治的文脈の中で展開する様子を詳細に記述する材料を得た。

高等教育のマレーシア・モデルの創造時の

状況を社会学・人類学的に発掘した研究例はマレーシアの国内外になく、オリジナルな貢献と言える。

(2) 同モデルがマレーシア国内のエスニック関係および社会階層に与える影響

高等教育の民間化は高等教育の英語化を意味する。その点において、エスニック関係に注目すべき影響を与えた。なぜなら、既述の通り、民間のカレッジは主にブミプトラ政策下の非マレー人の大学進学的需求に応える形で成立し、実際、非マレー人の学生比率はマレー人と比べて著しく高いからである。エスニシティ関連の統計は敏感事項であるので公表されていないが、筆者が以前いくつかの主な民間のカレッジで行った調査によれば、在籍するマレーシア人の学生のうち約8割が華人である(2001年時点)。

こうした不均衡な比率はエスニック関係の観点から見逃せない。高等教育の英語化は、エスニックな境界と言語的な境界を重ね合わせることによって、マレー人と非マレー人の格差を拓ける可能性を持つ。マレー語を教育言語とする国立大学で学んだマレー人と英語および英語圏のカリキュラムを用いる民間の高等教育機関で学んだ華人とでは、言語文化資本に著しい格差が現れる。第1に、多民族社会マレーシアにおいて大学卒業生が就職する際に英語力が競争力の要である点が確認された(クアラルンプールとペナンで民間企業の経営者を対象に行った調査)。第2に、これはマレー語話者としてのマレー人と英語話者としての非マレー人という差にとどまらず、単一言語話者と複数言語話者の差として表れる点を確認した。既に初等・中等教育のマレー語化によって、エスニシティにかかわらず、マレー語は「国民言語」(マレーシア語)として共有されている。従って、英語が教育言語である民間の高等教育を受けた華人は、家庭環境や中等教育のタイプにもよるが、多くは華語を話すので、三言語話者である。他方、学生の大多数がマレー人である国立大学は基本的にマレー語による単一言語の高等教育である。マレー人と華人の言語文化的資源の格差が、高等教育制度の差によって固定される危険性があるということの意味する。華語はアジアにおける主要な商業言語であり、英語はグローバル・ビジネス言語である現状を考えると、マレー人と非マレー人の間に経済的格差が生じる可能性は大きい。実際、マレーシア国内の民間セクターの企業を株式所有の大まかな割合で見ると、欧米系4割、華人系4割、マレー系2割である。欧米系の企業の使用言語は英語使用、華人系でも大企業では英語使用である。中小企業でも英語は使うが、華語使用の場合が多い。

高等教育の民間化すなわち英語化がマレー人にとって経済的に不利に働く新たな要因として浮上した。もちろん、過度な一般化は避けなければいけない。国立大学には非マレー人も学ぶし、様々な奨学金制度で海外留学するマレー人も多い。特にマレー人のエリート層・ミドルクラス上層は英米豪の留学経験者が多く、英語力は高い。また、国立大学以外の高等教育に通うマレー人も増加した。さらには、国立大学においても実用英会話教育が積極的に行われ、英語が使える人材の育成を重視する動きが活発化している。しかしながら、英語による高等教育を国内で安く受けることを可能にした民間の高等教育制度が、教育の機会を平等化するという当初の目標とは裏腹に、結果として、エスニックな格差を促進している側面を否定することはできない。高等教育の民間化は英語化であり、非マレー人、特に、華人の多言語資本を再生産していると言えることができる。

しかしながら、社会的属性についてより正確に記述する必要がある。民間の高等教育を享受できるのは、都市のミドルクラスである。民間の高等教育機関は都市に集中して、その学費を払える社会層は限られている。都市住民としての華人、非都市住民としてのマレー人の複合社会的構図が依然あるため、華人の比率は高くなる。もちろん、都市の住民には、エスニシティに関わりなく、始めから文化資本に恵まれた社会層の存在が顕著である。むしろ筆者の調査で浮かび上がったのは、ミドルクラス下層出身者が英語とコミュニケーション・スキルを身につけて上昇移動する機会を民間の高等教育が創出している点である。このように、エスニシティと社会的階層さらには年代や地域との組み合わせにより多種多様な社会的カテゴリー別に言語資本とその再生産を分析することが肝要である。本研究の枠組みでは、言語社会学的な分析をそこまで深める余裕はなく、今後の課題となった。

(3) マレーシアにおける高等教育の英語化が留学生の国際移動・移住経路に与える影響

民間の高等教育が産業として発展するために必要な条件は、学生数の増加であった。海外の留学生市場が注目された。早い時期から特に重視されてきたのが、中国人およびインドネシアの華人である。実際、多くの民間のカレッジにおいて中国とインドネシア出身の留学生比率は圧倒的に高い。9. 1 1以降はマレーシア政府の呼びかけもあり、中近東、アフリカその他の地域のムスリムの留学生が次第に増えてきた。

当初、中国人、華人留学生の多くはマレーシアを「西洋」諸国への中継地と見なした。2 + 1方式に従って、マレーシアで2年履修

後「西洋・英語国」の大学への進級が好まれた。こうした需要に対して、マレーシア政府も一時アジアの教育ハブ（regional educational hub）として位置づける政策を打ち出した。常に変化するグローバルな政治経済状況の中で、比較的容易に行ける「アジアの中の英語圏の大学」の出現は、一時逗留してスタンドバイすることを可能にしてくれる中継地として注目された。留学生の移動における中継地の設定は、脱領域化していく英語圏高等教育の傾向を象徴的に示している。ポストコロニアルな世界における留学生の移動パターンを考える上で重要な傾向である。単一の目的国に行って自国に戻る往復型の海外留学ではなく、さらに次の複数の目的国への移行を可能にしてくれるハブの発想は、準英語国である多くの旧植民地諸国の大学にとって様々な可能性を示している。その後、3 + 1を好む留学生が増え、政府も中核的教育拠点（centre for educational excellence）と位置づけるようになった。

マレーシアの民間の高等教育機関の留学生に関する統計的資料は不備もしくは入手不可能であったため、事例研究を通して質的に理解することが肝要である。華人留学生をマレーシアに送り出す国としてインドネシア、ムスリム留学生を送り出すアジアの国としてモルジブの事例を考察し、これらの国のマレーシア留学経験者、留学斡旋業者などへの聞き取りを通して、留学生の移動経路に影響を与える諸変数を同定することができた。（なお、中国調査は諸事情で見送った。）

(4) マレーシアの高等教育モデルの国際技術移転と文化的仲介者の役割

英語を媒介とする高等教育のマレーシア・モデルは、中国や他のアジア諸国（その多くはベトナム、インドネシアなどの途上国）によって比較的安価に英米流の高等教育を導入する方式として模倣されている。本研究では、ベトナム国立大学国際学校の事例を重点的に調査した。同校はマレーシアの主要な民間の高等教育機関の1つである HELP University College と提携関係を結び、後者の英米豪の大学とのトイニングあるいはトランスナショナルな単位移行を通して、最初の1、2年をハノイ、その後の1、2年をクアラルンプール、そして最終の1、2年を英米豪での履修を可能にするプログラムに契約した。興味深いのは、ベトナム側がこうしたプログラムへの参加を通して能動的にトランスナショナルな高等教育プログラムを構築する技術を習得して、自ら直接海外の大学とのトランスナショナルなプログラムを構築するようになった点である。（フランス、ロシア、中国の大学をも対象にしているが、英語圏が圧倒的に重要である。）開発途上国

のオルタナティブな高等教育としてマレーシア・モデルの記述が移転される様相を象徴的に示している。

時系列的に言えば、これより以前、中国の市場開放に伴い、マレーシアの民間の高等教育機関の企業家達は、中国側との事業提携を通して、英語を媒体とするトランスナショナルな民間の高等教育の技術移転に貢献した。移転された技術は、トランスナショナルな教育プログラムを事業展開するマレーシアの事業者の専門的な知恵と運営技術および人的ネットワーク力である。ここで、マレーシア華人の役割に注目した。英米豪などの大学との事業提携経験を通して蓄積したノウハウと人脈に加え、多言語話者で多文化資源を持つ華人の仲介者は、西洋的(特にイギリス的)制度文化と中国的商業文化の両方にも通じている。特に、イギリスやイギリス連邦の大学入学準備に関する制度文化は独特であることを考えると、イギリス流の教育制度文化を内面化し、中国・華僑的商業文化も内面化しているマレーシア華人は文化的仲介者として最適である。彼らが有する言語文化資源の動員のされ方を観察し記述することができた。

こうした華人の文化仲介者の役割をどのように理解すべきであろうか。英語を媒介とする西洋英語国の教育をマレーシア人が推進することはいかなる意味を持つのであろうか。英語化を促進するグローバル資本主義における周辺性の持続あるいは半周辺性の構築・再構築において積極的な役割を果たしたと言えないだろうか。この問に対する解答は今後の課題として残った。

解き明かすべき課題は残ったが、アジアの国で内発的に創造された社会経済的モデルが他国へ伝播・技術移転される様子を社会学的に研究した点においてオリジナルな貢献として評価できるであろう。

(5) トランスナショナルなエスニシティ

以上のトランスナショナルな活動領域において、マレーシアの多民族性・多言語性・多宗教性を資源として活躍するマレーシアの文化仲介者の役割を詳細に考察し、理論化を試みた。

上記のような事業提携を通して、マレーシア国内の華人と中国の中国人との繋がりが促進されている。こうした連繫をトランスナショナルなエスニシティと呼ぶことができるであろう。これは、既存の情動主義的・個別主義的社会関係や同郷ネットワークの動員ではなく、手段的な関係として成立している点が重要である。教育産業の事業展開に関する社会的技術の需要・供給をめぐる手段的な連繫である。また、動員されているのは、華人・華僑の経済的資本ではなく彼らの有し

ている文化仲介的技術・能力であり、それはシンボリックな資本である。

マレーシアのマルチエスニシティは貴重なシンボリックな資源である。エスニシティがトランスナショナルな繋がりに展開するのは華人の事例に限られない。前述の通り、マレーシア政府は中近東の学生募集キャンペーンを実施し、民間セクターも市場開拓を進めている。この場合、ムスリムの国としてマレーシアは表象され、マレー人エスニシティの宗教性が強調され、ムスリムのトランスナショナルな繋がりが表れている。

華人エスニシティと中国・華人文化圏、マレー人エスニシティとムスリム文化圏の連繫の展開に見られるように、マレーシアのナショナルな次元とアジアのトランスナショナルな次元は連動している。英語化するアジアの教育産業市場において、マレーシア国内のマルチエスニシティとマレーシアを取り巻くトランスナショナルな民族性や宗教性を結びつける連繫が活性化されている点を確認した。

*以上、要点のみを記したが、詳しい記述と分析は現在執筆中の単著『英語化するアジア』(仮題)(名古屋大学出版会)で公表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① Kosaku Yoshino, 'The dominance of English: critical discourses and a sociological approach', *Sociological Studies* (Sophia University), 査読無, no. 34, 2010, pp. 1-17.

[学会発表] (計5件)

- ① Kosaku Yoshino, 'Multiethnicity and its transnational connections: the Malaysian experience', Workshop on 'Migration and Multicultural Coexistence in East Asia', organized by the Institute of Comparative Culture, Sophia University and Peace and Democracy Institute, Korean University, sponsored by the National Research Foundation, Republic of Korea, 19 February 2011, held at Sophia University, Tokyo.
- ② Kosaku Yoshino, 'Further Reflections on Japanese Sociology', Conference on 'Japanese Studies in Japan and its Neighbors', organized by the University of Niigata Prefecture, 18 October 2010, held at the University of Tokyo.
- ③ Kosaku Yoshino, 'The Englishisation of Asia and global social structure: a sociological

enquiry', Invited lecture, School of Language Studies and Linguistics, Faculty of Social Sciences and Humanities, Universiti Kebangsaan Malaysia, 23 March 2010, Bangi Malaysia.

- ④ Kosaku Yoshino, 'The Englishization of higher education in Asia and the migratory flows of international students', Symposium on 'The Right to Move?: Debating the ethics of global migration', supported by the Carnegie Council and the Institute of Comparative Culture, 12 December 2009, held at Sophia University, Tokyo.
- ⑤ Kosaku Yoshino, 'Malaysia and its Inter-Asian connections', Invited lecture, Pacific Basin Institute, Pomona College, 27 February 2008, Claremont, California, USA.

[図書] (計2件)

- ① 吉野耕作、盛山和夫・上野千鶴子・武川省吾共編『公共社会学』第1巻所収、東京大学出版会、2011年出版予定。(論文表題は「多民族社会における高等教育の公共性—マレーシアにおける国家と民間」)
- ② Kosaku Yoshino, in Kwok-kan Tam (ed.), Open University of Hong Kong Press, *Englishization in Asia: Language and Cultural Issues*, 2009, pp. 70-87. (論文標題は 'Englishization of higher education in Asia: a sociological enquiry')

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉野 耕作 (YOSHINO KOSAKU)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：50192810